
山神少女 + α

ヒトエビト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山神少女 + α

【Nコード】

N0337X

【作者名】

ヒトエビト

【あらすじ】

「山神少女」に関わる本編以外の作品（頂き物やweb拍手小話など）を置いています。

画廊

ここは頂いたイラストやCGを置いております。

閲覧される際に

？自分のイメージを大切にしたい！

？イラスト全般が苦手だ！

？これこれこういう絵柄じゃないとやだ！etc…

という方は、ここでひとまず二、三步バックステップした後に華麗にターンをしていただきますようお願いいたします。ムーソウオークも可です。

なおイラストを描いてくださる心優しい方を作者はこれでもかというほどお待ちしております。

随時募集中です。近くのコンビニに足を運ぶかのごとき気軽さでご一報ください。

それでは頂いた順番にご紹介していきます。

←

● こんたろう 様

> i 2 5 3 2 5 — 2 0 8 4 <

エコーと天邪鬼。優しい淡い色使いがほのぼのとした雰囲気をも
しだしていますね。

甚平姿がヒトエビトのイメージとぴったりでした！

ちょっと首を傾げてるエコーがまた愛らしいことこの上ないです。

天邪鬼の表情も、彼の性格がすごく出ています。

● もふもふ 様

> i 2 7 1 8 7 — 3 3 8 6 <

こちらも天邪鬼とエコー（幽谷響）で天幽少年！

背景の花や模様の美しさ、神社（ボロくない！）の荘厳な佇まいに
見る度うっとりしてしまいます。

個人的に嬉しかったポイントはエコーの紅葉です。拍手小ネタまで

取り入れる細やかさに脱帽しました！

● Liz reel 様

> i 3 1 5 2 9 — 2 4 9 6 <

山の主こと御大（人型バージョン！）

圧巻の一言の贅沢な3DCG。あわわなんと見目麗しい御大でしょう。まじまじと観察しても顔に毛穴ひとつ見つかりませんよ奥さん！狐火まで出してる御大、臨戦態勢ばっちりです。作者はもう完全降伏ならぬ完全幸福。ありがたやありがたや。あとヒトエビトはLiz reelさんの小説のファンです。

● 品 様

品様からはなんと計5枚も頂いております！
この贅沢者めが！ すみません！ いえあ！

> i 3 2 4 6 7 — 4 1 1 2 <

猫又

あわわわなんと上品な猫又でしょう。耳が！ 尻尾が！ 見返り美人っ！

こう……二本の尻尾をたしと揺らしつつ「あきまへん」とか何とか、はんなり諭して欲しくなりますね。あと顔の三色配分が素晴らしいので大っ変満足でしたー！

>i33894<ruby><rb>4112<

</rb><rp>(</rp><rt>どどめき</rt><rp></rp></ruby>百々目鬼

なんと描き直しまでしてくださった一枚です。個人的に前の太ももに目がいつてしまう百々目鬼も好きでしたが。あと描き直されたことにしばらく気が付いてませんでした。気付いた時の驚きといったら……。

腕の目の異様さとスタイルが素晴らしいです。黙って立っているだけでもおどろおどろしくて素敵です。オプションの小鳥さんがこれまた愛らしくて絶句……！

>i32778<ruby><rb>4112<

牛鬼</rb><rp>(</rp><rt>うしおに</rt><rp></rp></ruby>

マッチョ！ マッチョ！ 見るからに強そうな立派な体躯、手には酒瓶と盃。こういうラベルの日本酒が焼酎が売っていそうな気がしてなりません。あつたら即買います。

牛鬼の右下あたりをよくご覧下さい。ほら、恐怖におののく主人公がいるはずです。さあ心の目で見てください！

> i 3 2 8 7 8 — 4 1 1 2 <

エコー（口笛練習中）と天邪鬼（朔月嘲笑中）

口笛の音や笑い声が今にも聞こえてきそうです。天邪鬼が生き生きしていて良い表情してますね。

そして心の目で見ましたところ、真ん中辺りに確かに彼女がおります！ よくご覧頂きたい。——わかりただけだろうか？

では心の目で見えなかった人向けに……

> i 3 2 3 7 2 — 4 1 1 2 <

どーん。これが透明主人公です！！

作中、外見描写が巫女装束以外ほとんどない（あえてですが）にも関わらず、こんなにめんどく描いて頂きました。そつと膝を抱えた

姿が彼女の孤独を象徴しているかのようです。凜とした表情にも寂しげな表情にも見えますね。
筆で書いたようなロゴがすごく好みます。

●素晴らしいイラストを描いて下さった方々本当にありがとうございます！
届け感謝ビーム！
じつつつくりと網膜に焼き付け、PCの液晶に穴が開く勢いで執拗なほど舐めるように眺めております。

●「描いてみようかな」「描きたいな」「描いてやるよ」「もう描けたよ」「カッとなって描いた」「おっと手がすべったあ！」「……」などなど。

ヒトエビトはいつも何度でもお待ちしております！ ばっち来いです！ むしろ行きます！ ぜひともご連絡下さいませ！。

web拍手小話まとめー（前書き）

web拍手内に掲載していた小ネタや小話をまとめたもの。加筆修正あり。

しょうもないものから本編の裏側に迫るもの、作者のつぶやきなど。

web拍手小話まとめ

【第5話5 おまけ（その後）】

「まままま、待って下さい！ 冷静になりましょう、私男じゃないですから……ってホントにどこ触ってるんですか！？ ひゃあっ」

『手探り、というのもまた楽しい戯れでありんす——おや危ない』

「はあはあ……エ、エコー！！ グッジョブありがとう！！（い、今のうちに距離取ろう。うおお襦袢脱がされなくて良かったよー）」
『ちっ、ほんに無粋な子でありんすねえ』

『あゝあ！？ もう終わりかよ！ 好い悲鳴が聞けると思ったのによお。つまんねえなあおい』

『……驚いたな。あの虚が戒めの縛を破り、自ら動くとは。昨夜も目を疑ったが』

『ああ、天邪鬼はんを放り投げはったあれどすな。ふふふ、おもしろいことお。百々目鬼はんでも「目」えを疑うことがあるんどすなあ』

『幽谷響や。わっちと戯れるにや、お前はまだ早うありんすえ？』

『どっから喋ってんだテメーはよ』

「ど、どうやって天井に張り付いてるんだろう……女郎蜘蛛だからかな」

『嘆。話が露ほども進まん、鴉のよ』

『——御意』

【クラトとニーナ】

「おい、起きろニーナ。お前なんでいつも寝起きだけ悪いんだよ」

「すやすや」

「おい、そんなんで一人旅は大丈夫だったのか？ 無用心過ぎんじやねえか」

「すやや」

「二ーナ。起きろ」

「すうすう」

「——いい加減起きねえんなら」

「むにゃ？ あ、お早うございます。クラトさん」

「……………ちっ」

「な、なんで挨拶ただけで舌打ちするんですか!？」

「……いや、身の危険は本能的に察知できるのか。安心した」

「一体何の話ですか!？」

【天邪鬼とエコー】

『なあ音の聞いてよ。僕さあ、こないだお前の真似してサクヅキサマに近づいたんだけど。これがぜんっぜんバレなくってさ、すっごく面白かった』

『……………』

『でさ、バレないついでに後ろから抱きついてやったんだ。逃げられないようにね。で、そのまま喉を引き裂こうか絞め殺そうか迷ってたら、運悪く御大がいらっしやってさ。結局何も出来ずじまいだよ。あーあすっごく残念』

『……………』

『でさ。あいつ僕に何したと思う？ 笑い声上げながら僕の髪ぐっしやぐしやに掻き回してきたんだよ。ホント腹立った。あれ何がしたかったんだろうねえ。嫌がらせ?』

『……………』

『お前もあいつからあの嫌がらせされたりするわけ？ やっぱ殺してこようかな』

『……』

『なんかお前さあ、最近人の真似しなくなったね……って、なんでいきなり殴ってくんだよ！ ちよつと何。待てって！ 意味わかんない！』

口は災いの元。

そして実はこっそり気付いていた朔月。

【エコーにお仕置き】

「こらエコー、ちよつとこつち来なさい。そうこつちこつち——
いい？ もう『ブツ殺す』なんて言葉、使ったらだめだよ」

『使ったらだめだよ』

「そうです！ 悪い言葉を使ったエコーにはお仕置をします。えい、ぶた鼻の刑だ。どうだ参ったか？ ブヒブヒ」
『………』

あ、あれ、怒っちゃったかな。

『ぶひぶひ』

参りました。

無表情なのに可愛かった、今の。くそ。

【ひとりごと1】

『おい、朔月の娘。ここにいるか?』

「はい居ますよ。何か御用ですか百々目鬼さん」

『一つ聞きたい』

「なんですか」

『「ちきんらーめん」とは、何だ?』

「な……なぜソレを!?!」

『お前が以前、社の中でぶつぶつ言っていた。「ああ今すっげえちきんらーめんが食べたい」と』

「ぐああああ!! やっぱり私のひとり言盗み聞きしてたんですね!?!」

『私は盗みの妖だからな。それで、ちきんらーめんとは一体何だ』

「なについて言われても。そうですね……すぐおいしくて、すごくおいしい食べ物ですよ」

『わからん』

「あ、なんだか急にお腹がすいてきました。ちょっとお供物頂きに行ってきます」

『ちきんらーめん……か』

【ひとりごと2】

『そうか。分かった』

「何がです?」

『いたのか朔月の娘。本当に気配が無いな、お前は』

「えーっと魔力の気配ってやつですか。何度も言いますが、そんなファンタジーなもの持ってませんからね私」

『ふぁんたじい? それよりも、ちきんらーめんのことだが』

「まだ考えてたんですか!？」

『直ぐ美味。かつ、大層美味。ならば答えはアレしかあるまい』

「え!？ あるんですかチキンラーメン!？（わくわく）」

『ああ。抜きたての猪の心臓がそれだろう。まだ少し動いているとなお良いな。あれは美味い。取ってきてやろうか?』

「いいえお気遣いなく」

『そうか。……? お前泣いてないか』

「全然泣いてませんよ!!」

【牛鬼がゆく】

『おい、俺の酒が飲めねえってのかあ?』

?朔月の場合

「いや、あの日本の法律ではですね、未成年の飲酒は……ひっ、すみません飲めます!!」

（しかし山の主が現れ、渋々引き下がる牛鬼）

?エコーの場合

『……………』（ふい、と無表情で顔をそむける）

?天邪鬼の場合

『飲めねえってのかあ、だって。ぶ、あはは。死ぬ?』（戦闘開始）

?百々目鬼の場合

『あるだけ持ってこい』（気怠げに飲みつつ、かなりの酒豪っぷり。つまらん）

？女郎蜘蛛の場合

『うふふふ。……わっちは酒より飲みたいものがありんすえ？』
(身の危険を感じとっさに攻撃。戦闘開始)

？鴉天狗の場合

『要らぬ』(溜め息をついて飛び去る。つまらん)

？猫又の場合

『あきまへん。ほんまにのんべえどすから牛はんは。朝から晩まで
酒酒で……聞いてはりますのん？』

(説教に飽き、離脱)

結論：絡むなら朔月。

【エコーの視線 第5話7おまけ】

じいーーーー。

「……っ」

「ん？ どうしたのライヒ」

「あの、その物の怪がさつきから……いえ、なんでもないです」

「エコーがどうかした？」

「いえあの目が……」

「目？ あ、ライヒちよつと目が腫れちゃったね。泣いたらすぐに
冷やした方がいいよ。布かなんか川で濡らしてこようか」

「……その、僕の目じゃなくて。でもあの、ありがとうございます
……」

「ああ、ごしごしこすっちゃ駄目だよ。ますます腫れるから。エコ

「？ どうしたの」

『濡らしてこようか』

「お、川に行ってきたしてくれるの？ ありがとう、優しいねえエコーは。よしよしよし」

『……』

「（う、見てる…… すごく凝視してる……）」

「（実はすごくライヒと仲良くしたいのかなエコー。おお、それはなんか和むなあ）」

さて、その視線の意味は。

【ちょっとやってみただけ】

今日の天気は土砂降り。

なんでも、満月の後には月呼雨という激しい雨が降るらしい。

自由奔放な妖怪たちも昼間はそれぞれのねぐらに戻るらしく、現在神社の中は閑散としている。参拝者はもちろん一人も来ない。すっかり手持ち無沙汰になった私は、エコーに口笛を教えることにした。

「そうそう、唇と唇の隙間を開け過ぎないで。うん、ちゃんと音が出てきたね。上手だよエコー」

『上手だよエコー』

「あははは、うん上手上手」

ぴいと細く口笛が鳴るたびに、エコーの瞬きがぱちぱちと心なしか増えている。

あーこれ喜んでるな絶対、分かりやすいなあ。無表情だけど、ほのぼのしていたら――

『はっ、下らない。ほんと馬鹿馬鹿しくって見てらんないよ。音の芸を仕込んでそんなに楽しい？』

なぜかねぐらに戻ってこない天邪鬼がそう言ってきた。
ふむ。

「うん、むちゃくちゃ楽しい！」

『死にたくなかったら今すぐ黙れよ、小娘』

正直に答えたら何故かキレられてしまった。怖い。怒りの沸点低くないかこの子。

そんな中、エコーはひたすらマイペースにぴいぴい口笛を吹いている。ふんと不機嫌そうに鼻を鳴らした天邪鬼は、狐のお面をぐいと被り神社の隅にごろりと横になった。不貞寝ですか。

ざあざあと、雨粒が神社の屋根を打つ。

単調な雨の音にだんだん眠くなってきた。

ぴい、ぴい。ぴゅー。

……エコーも頑張るなあ。

ぴい。

私はがばつと跳ね起きた。

「ちよ、今……！ー！」

『黙れ。殺すぞ』

雨はまだまだ、止まなさそうだ。

web拍手小話まとめ二

【第6話1その後おまけ】

『――御大』

『如何した。鴉の』

『もしや娘を腕に抱えておいでで』

『是。はて、朔月は見えておらぬだろう。何故分かる』

『先刻から幽谷響がこちらを見ております』

『笑。あれは主に関しては恐ろしく聡いな』

『御意』

【なんでかなあ？】

「クラトさん！ 昨日またお腹出して寝てましたよね！？ もう、風邪引いても知りませんよ！」

「あ？ あー悪い悪い。布団かけてくれたんだろ。ありがとな」

「な、ち、ちが、違います！ あたしはただ直視に耐えられなかっただけで……」

「腹筋をもつとちゃんと割りてえんだけどな。鍛えが足りないか」

ぺら。

「み、みみつ、見せないでください！」

「んだよ。そんなに顔背けなくてもいいだろうが。あ、腕の筋肉は」

「脱がないでくださいー！！」

「触るか？」

「触りません!!」

「遠慮すんな」

「してませ……っ、ち、近づかないでください!!」

「ちっ。なんでだようるせえなあ。おいニーナ、ちょっと待てって」

クラト兄ちゃんはカンナに優しい。

おねえちゃんにも優しい。

でもね、時々ちょびっとだけ意地悪してるみたい。

なんでかなあ？

【山童さん】

妖怪達と話すのはなかなか難しい。

中でも特に難しいのが、山童さんだと思う。

「おにぎりそんなに美味しいですか、山童さん」
「ばくばくばく。」

「ほっぺたにご飯粒付いてますよ、山童さん」
「ばくばく、ひよい、ばくばくばく。」

「腹が減ってはいくさは出来ぬですか、山童さん」
「もぐもぐ、ごくん、ばくばくばく。」

「でも平和が一番ですよ、山童さん」
「むしゃむしゃ、もぐもぐ。」

おかつぱ頭で小さな体。指の間につつすら水かき。
けれどもその胃袋の底は窺い知れぬ。

今日も今日とて、山童さんの前で私の独り言が空しく響くのであ

った。

【続・山童さん】

百々目鬼さんに聞いてみた。

「山童さんはどうしていつもお腹が減っているんですか」

『おや、もう山童がやって来る時期だったか』

「え、何ですかその今年も渡り鳥がやってきたかー的な台詞は。と
いうか結構前からいましたよ、山童さん」

『ああお前は知らないのか。奴は平生、河に住まう物の怪だ。秋頃
になると山にやって来る』

「そうなんですか。……ん？ あれ、ひょっとして」
『どうした』

「山にいる時は山童さんなんですよね」

『そうだ』

「ええと、も、もしかして河にいる時の山童さんは……」
『河童だな』

だから水かきがあったのか、山童さん!!

二つの顔を持つ妖怪、山童さん。河の食べ物には飽きちゃったの
かな。

今度会ったら、泳ぎは得意ですかと聞いてみようと。

読み方：やまわろさん

【秋深き、隣は何を】

真っ赤な夕焼けが朔月山を燃やし尽くそうとするように照り輝く。その綺麗な火の粉を浴びたから、紅葉は赤くなつたのかもしれない。

「はいライヒ、お土産」

朔月山の石段を息せき切って駆け上がる少年を呼びとめ、隣に座らせて一緒に夕焼け空を見上げる。

ぼけーと二人で赤い夕日を眺めた後、そういえばとこそそと袂を探った。

昼間に見つけたものを取り出して、ライヒの手のひらにそっと乗せる。

「……僕に？」

「うん。あの大きな窓木の葉っぱだよ。見事な赤だつたからライヒにあげようと思って」

ぽかんとしたように紅葉を手に乗せていた美貌の少年が、はつと顔を上げた。

「あ、あのでもっ」

「紅葉、好きじゃなかった？」

「違います好きです！ あ……。あの、その、違います、紅葉のこと」

いや違うのか、違わないのかはつきりしてくれ。

「その……ぼ、僕も、なんです。朔さまにと思って」

持って来たんですと掠れた声で呟くと、ライヒは懷から小ぶりの紅葉を取り出した。

ああ、私たち同じことを考えてたんだね。

おずおずと差し出された葉を丁寧に摘んで、私はそれを左右に振って見せた。

「ありがとう。綺麗な色だね」

「それが、あの、お会いした時の袴の色と一番似ていたから……」
「覚えてくれてたんだ。うわー、嬉しいなあ」

この子は優しい子だ。

じんわりと温かな気持ちが私の胸に広がってゆく。

「僕もありがとうございます。これ、大切にします」

「そんなに紅葉が好きだったんなら、また取ってきてあげるよ」

「いえ。……この紅葉が、いいんです」

うーむ、欲がないなあ。

私だったらもつといっぱい集めて焼き芋とかしたいな。黄金色の
ほくほく芋か。じゅるり。

と、そこに。

『朔さま』

「あ、エコー。あれ、よく私の場所が分かったねえ」

突然現れるの妖怪にも慣れた私が機嫌良くそう言えば、山彦少年
はちらりとライヒを見やった。

とたんにびくりと体を揺らすライヒ。なんだかもう恒例だなこれ。
「なるほど、ライヒが座っていたから分かったんだね。あ、そうだ
エコーも手出して」

再び袂をこそそとまさぐる。

「はい。エコーにもおひとつどうぞ」

『——おひとつ』

ちらり。びくり。

「え、あの、朔さま……この物の怪にも拾って来られたのですか？」
「うん。そっだよー」

あとは山の主と猫又と百々目鬼さんと、まあエトセトラ。
とりあえず真っ赤で綺麗な紅葉を拾って、袂の中にしこたま詰め
て来たのだ。

うーん、秋のおすそわけなんて我ながら風流だな。

まあ天邪鬼は絶対受け取ってくれないだろうけど。むしろ私が真
っ赤に染まりそうで怖い。

「そう、ですか」

『朔さま。ありがとう』

秋深き、隣は何をしても
そつと落ちゆく一葉をきみに

【こぼれ話？ 謎かけ編】

本編第5話「嘘つき少年の本当の嘘4」で猫又が歌っていた唄。

息し辛いと苦しいと

憂き世別れ彼 ああ貴方

巢喰う殺しにや 醒まし酔い合う

浅まし嗤うわ 狂狂と

死ぬ気で喘げば 夜も終

生き辛いと狂い問う

気弱枯れ枯れ ああ貴方
救う頃にや 彷徨い逢う朝
廻らう輪 くるくると
今際のきわにや 世に縊^{すが}る

というのですが。これ、実は少しだけ言葉遊びをしています。
上と下の5行の歌詞を見比べてみてください。

何か一つ、気がつきませんか。

ばればれだと思いますが、ヒントは上の歌詞の5行目にあります。

答えは出ましたか？

それではよろしければ、お手を拝借！

【こぼれ話？ 解答編】

はい、今考えたので正解です。
というわけで答えは「死ぬ気」、つまり「『し』抜き」でした！

「いきづらいとくるしいと うきよわかれかれ ああ貴方」

の部分の「し」を抜くと、

「いきづらいとくるいとう きよわかれかれ ああ貴方」となり、

「すくうころしにや さましよいあう あさましわらうわ くるく
ると」が

「すくうころにや さまよいあうあさ まわらうわ くるくると」
となるわけです。

一体誰が得するんだこんなこぼれ話。ヒトエビトです。
拍手御礼のネタをかせごうだなんてちっとも思っていないせん。

【物の怪一面相】

笑うこともなければ、怒ることもない。
泣くこともなければ、驚くこともない。
君はいつも何を考えているのだろう？

「うーんわからんなあ……」

ぼふんと後ろに倒れ、空を見上げながらぼそつと呟く。
するとぐっすり眠っていると思っていた山の主がむくりと顔を上げた。

『訝。何がだ朔月』

ぎゃー！ 起きてなすつたあああ！

わたわたと尻尾から起き上がるうとしたら、袴の裾を思い切り踏んづけてぼふんと再び後ろへダイブ。

『呆。何をしている』

「ふが、すみません」

太陽の匂いにする尻尾に埋もれながら、ついでにその毛触りを堪能する。

『良い。して何が分からぬのだ』

「ええっと、エコーの表情というか感情です」

『ほう』

「今喜んでるかなーとか、なんとなく雰囲気は分かるんですけど、大抵無表情だからいまいち正確さに欠けると言いますか……」

あれはもう、ポーカーフェイスってレベルじゃない。

ほんのちよっぴりでもいいからもう少し喜怒哀楽を表現してくれ
たらなあ。

『異。あれは以前よりも感情豊かになったぞ。否。感情そのものを
得たと言っべきか』

「ええ！？ アレが！？ アレで！？」

『是』

ウソだ！

だって眉を寄せた顔すら見たことないのに。ど、どういうことだ。
いや待てよ、私には見せてくれないだけ……とか。

まさか遠回しに拒否されてるのか？ そっぴや前に「友達じゃな
い」って言われたっけ。

おおと一人で悶々としていたら、本人がひょっこり現れた。

噂をすれば何とやらだ。

……しかしエコー、いつもながらどうやって私の居場所が分かる
んだろうなあ。謎だ。

『朔さま』

うん。呼んでくれるのは嬉しいけれども、やはり鉄壁の無表情だ
った。くそ、無念だ。

はいはいここですよーと返事をしようとしたら、いきなりぼすっ
と頭を叩かれた。

私は声もなく毛の海に沈んだ。本日三度目のダイブだ。

『否。此处に朔月は居らぬぞ』

ええ！？ な、何言っではりますの山の主！？ その素知らぬ顔
はなんだ！

むぐ、尻尾が首に……こ、絞殺する気か。

『居らぬぞ』

淡々と繰り返すエコーの顔を見て、山の主がゆったりと低く笑う。
『さて、知らんな。当。忌子に会いに行ったのではないか』

『行つたのではないか』

『興。ぬしも其の様な顔ができるのだな、幽谷響よ』

『……』

『くつくつく、焦りは何も生まぬぞ』

『朔さま』

『睜。虚ろの木霊は何処へ行つたのだ。ぬしも随分解り易くなつたものよ』

いやいやいやいや。

全然分からんわ。

なんで普通にエコーの表情読めてるんですか、山の主。あれですか。やっぱり心の目ですか。

なんだろうこの悔しさ。私エコーの名付け親なのに。

「異議有り！ 何ですか納得できません！ 私にもそのスキル分けて下さいお願いしますっ！！」

がばつと尻尾の拘束を振り切り、私は握りこぶしで叫んだ。鷹揚とした動作で尻尾が波打つ。

『訝。すぎるとは何だ朔月』

別に、羨ましくなんかないぞ。

私だってエコーの気持ち分かる時はある。

ほら、その証拠に――

『……朔さま』

今、エコーはちよっぴり喜んでる。

そうだよ。

私はここにいるよ。

笑うこともなければ、怒ることもない。
泣くこともなければ、驚くこともない。
でもさ、エコー。

心が通じ合えるのなら、そんなの関係ないかもしれないね。

【物の怪一面相 おまけ】

『なんかさあ、気のせい？ さっきからすつごくウザったい視線を感じるんだけど』

「うーん。エコーが思いつきり顔顰めたらこんな表情になるのか。なるほどなるほど」

『はあ？ 何言ってるの、聞けよ。殺されたいわけ？』

「おお、エコーが冷笑を浮かべたらこんな感じに。ふむふむ……」

『ちっ、糞が。木の上から見てるだろお前、叩き落とすよ？ それとも手足へし折られたいの』

あーあ。

天邪鬼が笑顔になってくれたら、エコーの笑顔だって分かるのになあ。

web拍手小話まとめ三

【もう風呂になんか行くもんか】

私は悩んでいた。

恐らくこの妙な世界に来て以来、悩んでいない日なんて一日もないだろうが、とにかく悩んでいた。

何についてかという答えはシンプル、風呂である。今までは山の西側にある滝つぼへ足を運び、修行僧の如く行水をしていたけれど、これがまあ季節柄というか大分厳しくなってきたのだ。

上流の水は異常に冷たかった。しびれるほど冷たかった。しびれた。

……温泉に入りたい。

湯けむり立ち昇るあたたかい露天風呂に肩まで浸かり、朔月山の雄大な景色を楽しみながら美味しいものに舌鼓を打ちたい。今なら美しい紅葉を一人で贅沢に眺められます。

ああだめだ。考えるんじゃないかった。温泉に入りたくて力が出ない。

『おやおや、何の唸り声でありんしょう。もしやわっちの朔月でありんすかえ』

女郎蜘蛛が現れた！

？戦う？逃げる？挨拶する？悩みを打ち明ける

「さ、さようなら！」

とりあえず？でいいつ。

『待ちなんし』

だが回りこまれた！ 無難に？でいくしかないか。

「ええつと……こんなにちは、女郎蜘蛛さん」

『相変わらずまこと愛らしい声でありんす』

「は、はあ」

『ところで最近はどうして来てくりんせんのか？ わっちはいつでも待っている』

一体なんの話だろう。吉原通いなんてあつしはしてませんぜ！

『いつなる時も、ぬしのあられもない姿を想像すると愉しくてなりんせん』

ほ、ほんとに何の話をしているんだこの人！

『清げなる夜明けの斎戒沐浴。水は軟らかなる応えを残し、乱るる水面に夢も現も見せじとなれば忍ぶ花はいずこかと』

——ま、まさか。

「じよ、女郎蜘蛛さん……」

『なんでありんしょう』

「お、お住まいはどちらでしょうか」

妖艶な花魁姿の妖怪がうつとりと微笑んだ。

『わっちは、朔月山の滝主でありんす』

ぎゃああ——！！！！！！

行かない！！

もう絶対に、滝になんか行くもんか！！

＊＊

後日談

「うつ……なんで教えてくれなかったんですか、百々目鬼さん」

『何を言っている。見えぬものを如何にして恥じるというのだ』

「これは気持ちの問題なんですよ！ とんだ羞恥プレイをしてたんですよ私！」

『近くで叫ぶな。鬱陶しい』

「うわあああ恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい」

『難儀な奴だ』

【妖怪飯握り】

天邪鬼の性格は、心底捻じ曲がっていると思う。

人の不幸を指差して嘲笑い、悲しみには手を打って喜び、怒りはさらなる怒りを煽って面白がる。人の口調を真似て馬鹿にするし、残酷なことを平気で口にする。ありとあらゆるものに嘲りと罵声を浴びせなければ気がすまないのではないかと思うほど、全てに対して非好意的な態度しか取らない。

が、しかし。

『御大、お早う御座います！』

『雑。五月蠅いぞ天の。朔月がまだ寝ておる故騒ぐな』

『承知しました。ではそのまま永の眠りにつかせてやりますね』

「うおおいちよつと待て！ 起きた、起きたからやめて！」

『……ちつ、ああ面倒くさいなあ。目玉抉って口に突っ込んでやるよ小娘、それとも一枚ずつ爪を剥いでやろうか？』

「全部断るっ」

『天の、朔月で遊ぶな』

『はい御大！ 朝餉は如何がされますかっ』

『無。いらぬ。朔月に何ぞ支度してやれ』

『あはは馬糞でも食わしてやろうか小娘、泣きながら食ってよ。そして死ね』

「断る！！ 全っ力で断る！」

『天の』

『はい御大、僕に何なりとご用命下さい！』

が、しかし。

山の主に対してだけは全身全霊で尻尾を振る。

子どもらしい笑顔と殺気だった冷笑が、よくもまあ鮮やかに切り替わるものだ。

朝っぱらから死ねとか言われるのも慣れてきた自分がいる。

いやだなあ。怖いことばかり言う天邪鬼なんて私も嫌いだよ。

やっと神社から天邪鬼が出て行った後、山の主が尻尾を揺らして唸った。

『慮。朔月、あ奴はああ云う妖だ。気にせずとも良い』

「イイエ？ 別に気にしてませんよ、あんなの」

『笑。あれなりにお前を気に入っておる様だな』

「えええ！？ どの、どの辺りで、そう思われるんですか！」

『さてな』

しばらく山の主と話していると、がたりと神社の戸が開いて妖怪特製握り飯を持ったエコーがすたすたと入ってきた。山の主を思い切りスルーしてるけど、挨拶くらいしようよエコー！

ずい、と握り飯を差し出してくる。

え、朝ご飯もって来てくれたのかエコー！ さすが、優しい！

でも差し出してゐる方向違つよ！

「おはようエコー。わざわざ持つて来てくれたんだね、ありがとう」
少年の灰色の目がぱちりと瞬く。無表情のまま首を横に振った。

『わざわざ。違つ』

うん？ 違つなの？

と、急に山の主がくつくつと愉快そうに笑いだした。なんなんですか。

エコーがちらりと外を見て、それから握り飯を見つめて、思案するようにはちりと再び睫毛を瞬かせた。えーつと……まあいいや。いただきます。

握り飯は若干パサついてたけど、美味しかった。

『愉。馬糞でなくて良かったな、朔月』

「いやもう本当ですよー。ありがとうねエコー、ごちそうさま」
『くつくつく』

一体何が可笑しいんだろう。

でも朝ご飯食べたなら、天邪鬼にムカついてたのが治つたな。
よし、今日も山神業がんばりますかー。

＊＊

後日談

『ふっ』

「どうしたんですか、百々目鬼さん」

『いや、先日珍しいものを見た』

「え！？ 必殺、鳥の目視点ですね！ 何を見たんですか？」

『悪鬼の如き表情で飯を握る物の怪だな』

「それはまさか……よ、妖怪飯握り！？」

『何だそれは』

【将来は死人が出ます。】

「あのさエコー、私常々思っただけだね」

『思っただけだね』

「ライヒってめちゃくちゃ綺麗な顔してるよね」

『してるよね』

「あれって将来、絶対危ないと思う。いや今もかなり危ないけど」

『あぶない』

「うん。あれはリアルに傾国の美貌になるだろうね。ライヒを巡って戦争が起こってもおかしくないよ。すれ違っただけで死人が出るかも……死因は過剰な美貌を直視したことによる心臓停止で」

『朔さま。あぶない』

「うん？ いや私は危なくないよ。むしろ悲しいくらい平和だよ」

『平和。綺麗』

「そうだね、平和が一番だね。私もそう思うよ」

『朔さま』

「なあに」

『エコー。一番』

「うーんと（な、何がだろう）」

『一番』

「う、うん！ そうだね！ 一番一番！」

『死人』

「死人！？」

『ありがとう』

「ど、どういたしまして……？（だめだ全然わからん）」

＊＊

後日談

「ライヒ、変な人に声をかけられたらすぐに逃げるんだよ」

「え？ あ、のは、はい……」

「じゃないと戦争が起こるからね！」

「ええ！？ えっと一体何を……」

「もっと危機感もって！ ね！」

「は、はい。朔さまがそうおっしゃるなら……」

「ああもつ心配だなあ」

「……すみません」

「くっ、このままでは死人が！」

「死人！？（な、何を仰っているんだろう）」

【小さな獣と大きなぬくもり】

寒いなあと思って目を覚ますと、神社の中に数匹の小さな獣がいた。

赤茶色の丸っこい子狐だ。

ころころと神社の中を縦横無尽に駆け回っている。

『追』

『待。疲』

『休？』

『是、是』

『眠……』

『遊？』

『遊』

『遊！』
『走！』

勢い余ったのか、そのうちの一匹がぼすんと私にぶつかってきた。ころんと床に転がる子狐。円らな瞳が「あれっ」というふうに瞬き、きよんとした表情を浮かべた。もぞりと起き上がると、座っている私の膝にふんふんと鼻を寄せてくる。

恐る恐るといった感じで前足を乗せ、ふわふわの二本の尻尾が慎重に揺れ動いた。

くんと何かを確認するように小さな鼻がうごめく。

それでも納得いかなかったのか、最後に『……奇』と小さく鳴いた。

あわわわ。

可愛い。可愛すぎる！　なんかもう可愛すぎて眩暈がしてきた。

おかしいな、私は小型犬より大型犬派だったのに……。

もう辛抱たまらないので、膝の上を占拠している不屈きな生き物をひよいと持ち上げてみた。

うわ、ふわっふわ！　軽い！　やわらかい！　お前は羽毛クツシヨンか！

他の奴と比べてちょっと耳がギザつとしてるところがチャームポイントだな。

よし、お前なんかこうして、こうして、こうしてやる！

抱き締めて、頭を撫でて、頬ずりの刑に処した。ああ、癒されるなあ。

小さな顔を覗き込んで私はにっこり笑った。

「こんにちは」

『驚』

「ごめん、びっくりさせたねえ」

『不。見』

「うーんかわいい。きみの名前はなんて言つの？」

『……』

「あ、ちなみに私は朔月と申します。この山と同じ名前だよ」

『朔？』

「うん、そう。カツコ飯だけど」

それにしてもこの子狐、山の主のミニバージョンというか、尻尾の毛の感触や見た目がそっくりだ。もしか……山の主の子どもか？
けど、そもそも山の主って雄雌どっちだったっけ。お母さんだったらなんか笑える。

ふふふと笑っていると、遠巻きにこちらを見ていた子狐集団がようやく近づいてきた。団子みたいにぎっしりと固まってそろそろにじり寄ってくる。そんなにあからさまに警戒しなくてもなあとがっくりにいると、腕の中の耳ギザが、「なんかコレ大丈夫っぽいよー」と呼びかけるように鳴いた。

それを聞いた子狐たちが、ころころと一気に駆け寄ってくる。
おお、でかした耳ギザっ！

なになにこれどーなってるの、とばかりに子狐たちが私にまとわり付いてくる。背中に飛び乗ってきたり、腕に甘噛みしてきたり、ぐるぐると体の周りを回って鼻先を擦り付けてきたり、やりたい放題。

なにこの幸せ空間は……あ、痛い、腕痛い、でも幸せ。

『呆。何をしておる。其れはお前達の玩具では無い』

『あらあら、えらいおもしろい事になってはるなあ。朔月はん』

『ぶっ！ がっはっはっは！！ なんじゃありやア！？』

神社の戸が開いて、巨大狐と猫又と牛鬼が外から帰ってきた。
いよいよアニマル空間になってきたな、ここ。

山の主がのしのしと私のもとへやって来ると、尻尾の一本で実に

呆気なく子狐達を蹴散らしてしまわれた。

くっ、束の間の天国だった。残ったのは腕に抱いていた耳ギザのみである。

「お、お願いです、どうかこの子だけは……！」

『妨。何を言っておるのだ朔月。そも、そ奴らに此処への立ち入りは諾しておらぬ』

「ええ！　なんですか、こんなに可愛いのに」

『朔月はん、そのちっさい子おは赤鬼狐ゆつてなあ。物の怪より獣の方に近い小物なんどすえ。せやさかい、御大の社に転がしとくのはよおへんのどす』

『オラッ、散った散ったア！　踏み潰されたくなけりや外できのこでも取って来いや、チビ共』

『きのこで、そら牛鬼はんが今食べたいだけでっしやる』

『いいから酒だ酒！　今宵の宴をおっぱじめんぞ、オイ盃持つて来い！』

『あきまへん、御大の前でみつともないどす。それにまだ夕刻や』
『いいじゃねエか、どうせ人間は来ねエしよお』

ぎゃいぎゃいと言い合いを始める妖怪二匹を尻目に、山の主が私の隣でくあ、と大あくびをした。至近距離の鋭い牙にぎよつとした瞬間、ギザ耳が私の腕からぴよつと出て行ってしまう。

うわーん山の主め、絶対今のあくびわざとだろちくしょー！

ふわふわの尻尾が神社からいそいそと出て行くのを涙目で見つめていると、山の主が低く笑った。

『あれが気に入ったか、朔月』

「はい……。だってすごく可愛いじゃないですか。山の主にそっくりなんですね、あの赤鬼狐って」

『是。はて、初めに言わなんだか。我も元はあれだ』

「ええええ！？」

全然覚えてない！

いや、確かにそんなことを言ってたようなそうでないような……。『明。只の獣ならば赤狐だが、魔力が高まれば赤鬼狐と成り果てる』

そんな狐の進化系知らんがな。

ふと疑問が浮かび、私は山の主を振り返った。

——巨大な狐の姿をした山の神様。

「どうして、そんなふうになったんですか？」

聞きながらそつと手を伸ばして顔に触れてみた。大きな鼻、大きな口。

綺麗で優しくて恐ろしい、妖怪たちの主。

すつ、と山の主の瞼が静かに下りる。

沈黙が横たわった。

それはまるで、記憶の底にある何かを思い出しているかのようだった。

結局、私が山の主の答えを聞くことはなかった。

いつものごとく妖怪たちがぞろぞろと神社にやって来て、どんちゃん騒ぎを始めたからだ。

ちつ、空気を読みやがれてんだべらぼつめ。というかココって格上の妖怪じゃないと入れないらしいけど、だったら私ここにいてもいいのかと今更ながら心配になってきた。色々あれだけ一応人間だし。そんでもって幹部の妖怪？ じゃないと山の主には近寄ることも駄目らしい。え、本当にいいのかな、私……。毎回、至近距離にいるんだけれど。

でもその晩、私は妖怪達の宴が終わるまでずっと山の主にくっついていて。

なぜなら隙間風が寒かったから。

他の妖怪からちよっかいを出されないから。

天邪鬼の殺気からこっそり隠れられるから。

なぜなら——山の主が、なんだか少しだけ、寂しい目をしていたから。

だから側に寄り添っていようと思ったんだ。

「あの、私、山の主が今のお姿で嬉しいです。とても温かくてぽかぽかします」

なんていったって大型犬派ですから、私。

あなたがいるから寒くないよと伝えたくて、私は大きな狐を抱きしめた。

無言で尻尾が伸びてきて、ちっぽけな私をすっぽりと包みこんでくれる。

ああ、きつと寂しかったのは私の方だ。

ねえ。

誰にも知られず側にいるから。

どうか夜が明けるまで、ぬくもりをください。

そうすれば、もう寒いなんて思わないよ。

後日談

「あ、そういえば山の主の性別ってどっちなんですか？ 百々目鬼さん」

『何を言っているんだお前は。見れば分かるだろう』

「いやわかりませんから」

『きのこ食うか?』

「いただきます!!」

うおお秋の味覚だー！。

もぐもぐもぐ。

『おお、きのこが消えていく。面妖な』

……えーと、なんの話してたっけ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0337x/>

山神少女 + α

2011年11月25日23時49分発行